

論文
紹介

都会でがん患者があふれる？ —乳がん患者の将来推計から—

片山 佳代子 監事

神奈川県立がんセンター臨床研究所 がん予防・情報学部 主任研究員



地域がん登録のデータを活用した疫学研究からこの秋、世界初の学際的オープンアクセスジャーナルとして知られるPLOS ONEに掲載された拙論文の内容について紹介させていただきます。

本研究の発想は、神奈川県全体のがん罹患将来推計を行うためのデータは、ようやく蓄積されてきたけれど、2次医療圏単位で推計を行うことはできないだろうか？という所から始まりました。特に神奈川県はその位置関係からわかるように、東京都のベットタウンとして栄えた大都市が多く、団塊の世代が多く居住していることで知られています。

また日本は世界のどの国もまだ経験したことのない超高齢化社会を迎え少子化と人口減少が予測されています。しかし団塊の世代は806万という突出した人口構成を持ち、大都市圏に定住し、そのまま老後を迎えることが確実視されているのです。つまり日本は近い将来、都市部において急激な高齢化が進み高齢になればなるほど、がんをはじめとする医療需要は増加していくことがわかります。そこで、本論文はその人口動態の変化を乳がんを例にとり、2次医療圏単位で予測し、今後先進国が共通に直面するであろう都市部の高齢化へのがん対策を議論するためのデータを提供することを目的に執筆しました。

神奈川県は2次医療圏は11医療圏です。11医療圏単位に予測をすることも重要ですが、この2次医療圏をその地理的特徴や背景などから4つのエリアに分類しました。

(1, Urban center: 都心部 2, Town: 街 3, Outer city: 郊外 4, Rural area: 田舎)

今回、予測するために採用した方法は、長期間の過去のデータを外挿するやり方ではなく、罹患率を固定し、これに人口予測値を適応する、という方法で解析をしました。具体的には2010年の罹患率を使用し(100とする)他の年度を100との相対的な数値で示すものです(物価や雇用統計などでも採用されています)。人口予測データがしっかりとコホート要因法を用いて2次医療圏別、男女別で公表されているためにできた方法です。

結果は、県全体でみると乳がん罹患数は2025年をピークに減少していきますが、65歳以上に限ってみると圧倒的に都心部で増加していくことが示されました(図1)。需要(罹患数)と

図1. 将来における65歳以上の乳がん罹患数

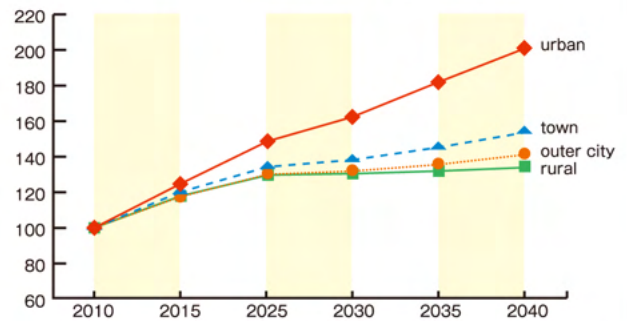
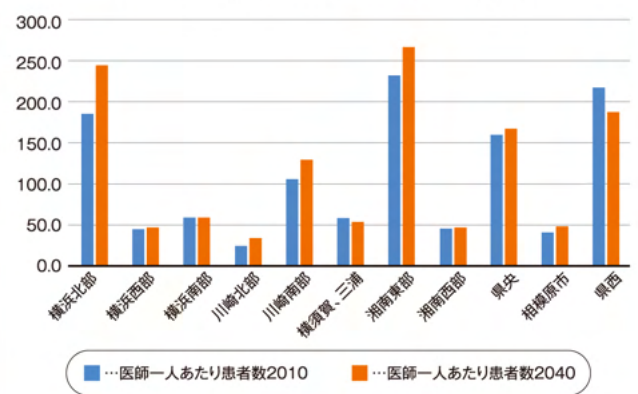


Fig.5 Estimation of Future breast Cancer Incidence in Kanagawa for Each Area(≥65years)
引用:Katayama K, Narimatsu H. Prediction of Female Breast Cancer Incidence among the Aging Society in Kanagawa, Japan. PLoSONE. 11(8): e0159913. doi:10.1371/journal.pone.0159913

供給のバランスを乳がん専門医数との関係でみると(図2)、突出して医師が不足している地域がわかります。こうした近い将来のがん患者発生分布がわかれば、医療政策を立案する際の貴重な資料になるはずで

す。本研究は、団塊の世代が多く居住している他の地域でも同様のことが起こること、また地域がん登録データの蓄積がない自治体でもすぐに解析することができる点も大きな意義があると思います。ぜひご参考にしていただければ幸いです。

図2. 乳腺専門医1人あたりの乳がん患者数



作成:片山 2016

最後に論文紹介の貴重な機会を頂き、ありがとうございました。内容の詳細については論文本文をご参照ください。
(<http://dx.doi.org/10.1371/journal.pone.0159913>)

最後に、神奈川県地域がん登録のデータ管理ならびに入力作業を黙々と実施して下さっている方々に深謝申し上げます。